

	<p>2009年3月15日 第71号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

街路樹にもホスピス・ケアを！

川越街道や国道17号線を始め、板橋区の町並みの中を通っている片側一車線の歩道などには、ある一定の間隔で普通街路樹が植えられている。街路樹が植えられているのはもちろんそこを通る行人にとっても悪いことではない。いやむしろ、人々にとって目に緑の植物の陰影が映り、季節ごとの花々を楽しめるのは、私たちに精神的な憩い



写真1 下赤塚駅付近の街路樹

をもたらし、二酸化炭素の吸収と酸素の放出・空中の粉塵を葉に受けることによる大気浄化など、身体的な健康を支える上においても大変必要な存在である。そのようなことを思うとき、大切な区内の街路樹の管理は一体どのように行われているのだろと、気になるところである。

街路樹の管理方法に関する提言や様々な指摘は、「いたばし水と緑の会」の会誌の中で何度か掲載されているが(例えば、「街路樹について」第57号、「板橋区の木ケヤキの気になること」第60号、「街路樹の樹形の大切さに思う」第61号)、そこで意識的に取り上げられている事柄の一つは、街路樹の管理としてのいわゆる剪定である。剪定そのものはその樹木の本来の樹形や植えられている土壌など生態的な周辺の状況、建物や電柱との関係などによって、その必然性の上で行われることはあり得ることである。しかし、「いたばし水と緑の会」の会誌に掲載されている文中で指摘されている管理上の欠点は、そのやり方のひどさ、稚劣さ、強引さなどに対してされ

ているものである。剪定の現場は、見た目は通行人にも大変目立つやり方である大々的な枝降ろしに他ならない。ただ、予算の消化や業務の執行を依頼する業者との関係の中で、区側にも言い分はあるかもしれない。

「東京都街路樹管理規程」についてその辺のところを調べてみると、(整姿及び整枝)についての条項が第5条にある。《第5条 街路樹の整姿及び整枝は、別表に定める区分により、定期または随時に行うものとし、古損樹木は、速やかに撤去して補足するものとする。》この条文の別表に記載されていたのは、スズカケ、ケヤキ、イチョウ、ヤナギ、サクラなど全17種の樹木を、“整姿及び整枝”の時季を毎年・隔年・随時の3段階に分け、例えば毎年の項ではさらに7月～8月(ヤナギ、ポプラなど)・1月～3月(エンジュ、ニセアカシヤなど)・5月(アオギリ)のようにそれぞれの樹種の“整姿及び整枝”としての時季を示している。しかし、肝心の“整姿及び整枝”の方法についての樹種ごとの詳細な指示はどこにも見られない。つまり、剪定の「時季」は決められているものの枝を切るときにどのような知見を持って行うか、どんな配慮をその樹木に対して持つか、剪定した後その樹木はどんな姿になっていたらよいか、など剪定技術の最も大切な事柄についての考慮、および配慮はされていないのである。ということは、区の要請によってこの仕事を請け負った業者は言われたままに、あるいはその会社の都合によって指定された時期に枝降ろしをするということである。ましてや、剪定後のその樹木に対する、いわば人間の手術後に対するような深いケアなどには、一切触れられていない。私はかつて、高島平のコブシの街路樹(大門から新高島平)がもの見事に強剪定され、数十本以上もある通りのコブシの木全体で咲いている花が2～3つ程であったのを見て、板橋区に抗議文を書いたことがあった。区はそれに応じてくれ、次年度から少しずつ花は回復しているかに見えたが、今年2月17日に観察したところ、その後も剪定された跡があり、僅かに花芽のついた枝は細々として、今年も花は咲くかもしれないが、それは弱々しく、とても満開の花を楽しむことは出来そうもない。一度強剪定によって痛めつけられた植物が本来の姿に回復するのは難しいことを悟ることは、植物を管理する上で大切な基本である。つまり、この事実は昨年「みずとみどり」の機関紙でいろいろと指摘されたケヤキの剪定についての文は、この間の事情がいまだに「区」と「業者」の間で、植物側に配慮された形では解決されていないことを物語っている。

ところで先日、下赤塚駅の付近を歩いていて、ふと街路樹の根元を見て驚かされたことがあった。その場所は踏み切りを渡り、交番を右に曲がったライフに向かった通りである。街路樹の樹種はハナミズキ。駅からライフに向かって、一列十数本ずつ両側の歩道に植えられているのであるが(前ページ写真1参照)、



写真2 燈色の碎石(?)で固められた根元。緑色のコケ類のような植物が生えられない。

驚いたのは、その根元がモノクロの写真では判別できないが橙色の砕いた石のようなもので固められているのである(写真2)。見た目には柔らかそうであったので、因みに車のキーの金属部分で穴を開けようと試みてみたが、その硬さはコンクリートのように硬いものであった。中には、(写真3)に見るように、本当にその一部がコンクリートで覆われているのもあった。時にこの歩道を歩くこともあったが、まさか樹木の根の周辺にこのようなことが施されていたとは思っても見なかったことである。踏み切り周辺の交番のあたりは、写真4に見るように普通に見る鉄製の「すのこ」状のもので覆われているので、上述したものは、今はあまり見かけない極めて特殊なものと



写真3 根元の一部がさらにコンクリートで固められている。



写真4 一般的に歩道で見かける鉄製のすのこ。1m2程で植物にかける負担は大きい。

なのか、と思う。写真2のものは、一見して柔らかそうな色合いに見えていることもあって、私は今まで注意を引かれなかったが、街路樹の根元に鉄格子が被さっているだけでも雨水が浸透するところは狭いわけで、この状態では鉄格子と比べてはるかにひどい虐待を受けているようである。これでは、雨水は表面を流れ、樹木の根には至らないと思われる。写真1の遠景では分かり難いかもしれないが、この通りに植栽されているハナミズキの状態は人間で言えば病人の姿を見るようで、その生育は極度に制約されていて痛々しくさえ見える。

街路樹は植えても、その後の管理は極めて悪く、前述のように枝は無残といってよいほど適当に切られた上に、植物の生育基盤である根元にもやさしい気配りが向けられていないのである。例えば、自然の状態の樹木では、落葉樹にしても常緑樹にしても生育の経過を通して自分で作り出した葉や枝は、一般に落葉樹は秋に、常緑樹では春にその時期を迎えると落ち葉となったりして自分の根元に落下する。やがて、それらは昆虫類・多足類・細菌類などの土壌生物によって腐食を受けて、土壌化したもとの樹木に栄養分として還元される。私は、それと同じことを街路樹にもしてあげたいのである。つまり、街路樹の根元をもっと柔らかく、地表面積も樹幹の幅に相当するように拡大し、年に一回でも堆肥などを根元にすきこんでも良いのではないかと思う。前述したコンクリート状の根元の状態は問題外であるが、鉄格子に保護されたように見える根元の状況も人間がその上を歩いて固めてしまい、鉄格子の隙間はゴミで詰まっていて、植物の生育

を根元のところから締め上げている。この鉄格子をこれからも続けるのであれば、少なくともその下に下駄状のものを履かせて少しでも根元から鉄格子を離してあげれば、根元にも少なからず空気が通り植物の根も伸び伸びとするはずである。枝々は切られ、雨水を受けることも極度に制約され、土壌中に十分に栄養を吸収する根も張れずにいる、痛々しい街路樹たちに、今病院などの医療で注目されている医療だけで患者係わっていくのではなく、心の深みまでに丁寧に係わっていく「ホスピス・ケア」を施してあげたい！ 言葉を発することの出来ない植物たちに代わって、私はこれらのことをこの原稿をお借りして提言したい。

しかし、歩道に植えられている樹木は勿論のこと公園に植栽されている樹木は、自分の足元に落ちたそのような落ち葉を自らの栄養分として還元できない。先日(2月7日)、エコポリスの近くにある”日暮台公園“の樹木の根を観察に行った折、公園全域が平地も斜面もどこもかしこも綺麗さっぱり落ち葉を掻き取っていた光景に出会った。案内してもらってそこに見たエノキの根はその影響をまともに受けていて、むき出しの根が掃き清められたような地表を長々と這い回っていたのである。公園のほとんど全ての地表には、雨水の流れを止めるような策はなく、公園の半分程の面積に広がる急傾斜は無制限に土砂が流れ取られて行くに任せた状態である。何故ここまでやるのかと慨嘆させられた。あるいはこのように管理されていることに近くの住民は喜ぶかもしれないが、そこに生育している樹木たちは年々身ぐるみ剥がれる思いで、体力を消耗していかざるを得ないことを、街路樹や公園の管理を取り仕切っている管理者の方々は知っているのだろうか。一日でも早くケアを施してあげたいと思ったのである。

最後に触れさせて頂きたいのは、猪鼻正二さんの書かれた「街路樹について」第57号のことである。この原稿には街路樹、特に板橋区内の街路樹のことが大変具体的に、しかも柔らかな言葉で紹介されていて大変参考になることが多いので是非お読みいただきたいと思っている。私もこの文を書いた後で、幾つか内容においてダブっていたことがあると気付いて恐縮に思ったが、猪鼻さんが最後に述べておられた言葉、「街路樹に関心を持つ人が増えて、街で素敵な樹木や草花が眺められるようになることを願っている」は、記事を読ませて頂いて本当に印象に残った、大変大切な言葉であった。

(岩田 浩司)

日暮台公園の落ち葉

日暮台公園は前野町5丁目にあつて、隣には特別養護老人ホームがあり、崖線の高台にあつて、道路を隔てて中台の南坂緑地も展望できます。日暮台公園はイヌシデ、コナラ、エノキ、ムク、ケヤキなどの落葉樹が大半で、低木はシロダモが多い公園です。今は葉がありませんのでシジュウカラ、ムク、ヒヨドリ、メジロ、コゲラなどが枝を行き来したり、カワラヒワが群れ、ツグミが地面で何かをついばんだりしている様子が見られます。

秋から冬にかけて、ケヤキ、ムク、エノキ、イヌシデ、モミジなどの落ち葉が土の上を埋めま

す。風が吹くといっせいに散る落ち葉は留めなく頭上に落ちてきて、孫と落ち葉キャッチゲームをしたり、静かな日は耳をすますと、落ち葉が落ちる時、下にある落ち葉と触れ合って、カサッ、カサッと小さな音が聞こえてきます。降り積もった落ち葉は布団のようにふかふかとなり落ち葉の上を歩くときは格別です。身近に日暮台公園があるのをありがたいと思っています。

ただし少し心配なことがあります。あんなに降り積もった落ち葉がいつの間になくなっていきます、人の通る道は大きな扇風機のようなもので吹き飛ばして掃除しているのを見た事がありますが、人が入らない斜面の落ち葉もなくなっているのです。「危険なので立ち入らないでください」と注意書きのある高い金網と柵のある斜面の落ち葉もなくなっているのです。風で飛ばされたのかと思いましたが、同じ斜面にある「小鳥の水飲み場」の低いロープを挟んで落ち葉はちゃんと残っているのです。ここは落ち葉がなくなっているところと残っている所がはっきり分かります。(写真1)

ここの公園は大きな木があるのはほとんどが斜面です。落ち葉がなくなってしまった木は根が露出してはっています。(写真2)

日本の土壌(表層土壌)の厚さは30cm~50cm位しかなく、この土壌で農作物も木も育っているのです。木の根がはる時は30センチ~50cmまでしか利用出来ない訳ですね。しか



写真1 「小鳥の水飲み場」のあるロープの中は落ち葉が残っている。



写真2 落ち葉をすっかり片付けられた林内。

も1センチの土壌が出来るのに100年かかるそうです。土壌は落ち葉などが微生物などの働きによって、長い時間をかけて変化して土になります、落ち葉を目の敵のように掃き続けるのは、もしかして将来の宝物を捨てているのではないかと考えてしまいます。以前三島先生の講演で「落ち葉はその木の財産で掃き続けているとやがて枯れてしまう」と聞いたのを思い出します。落ち葉の下で春を待っていた昆虫たちもなくなってしまいます。

2月7日昼ごろ、日暮台公園には作業車が来ていて落ち葉を片付けていました、落ち葉を大きな袋に入れて、トラックに積み込んでいたところでした、こうして何度か落ち葉は片付けられているのでしょうか。

私が考えるには、人の通り道の落ち葉は片付け、その落ち葉は立ち入り禁止の場所にいれる。ひとの立ち入らない斜面の落ち葉は片付けなくてそのままにしたらどうでしょうか？

木は温暖化の防止にも役に立ちます。緑を抜けて来る涼しい風のためにも落ち葉の片付けは一考してもらいたいと思いました。(瀬田政江)

越冬中の生き物を梅まつりで紹介

生き物の姿があまり見えない冬でも活動する虫もいるし、枯れ草や落ち葉の下で春を待つ虫もいます。作業の傍ら、見つけた越冬中のチョウチョ、カメムシ、テントウムシ、蛾、カマキリの卵などを梅まつりで展示しました。落ち葉や枯れ葉の大切さを理解してもらいたいですね。



ゴマダラチョウは、幼虫のときエノキの葉を食べるきれいなチョウチョです。冬になると木から下り根元の枯れ葉にくっついて越冬します。

観察・活動記録

(2009年1月～3月)

1月17日(土) 冬の観察会とバッタ広場の植生管理の検討

1月24日(土) 2月21日(土) 2月28日(土) バッタ広場の観察とササ、樹木刈り取り

3月7日(土) 8日(日) 梅まつり出展



キタテハ
2009年2月28日
猪鼻昭二撮影

キタテハについて

前々号の続きを書く予定であったが、全く暇がなく書けない。印刷開始予定時刻は数時間後である。猪鼻さんからメールで頂いたキタテハの写真(前頁)を思い出した。そうだこれでごまかしてしまおう。行間を空け、写真を大きく入れ、書くスペースも減らしてしまおう。

私と同世代の東京周辺の虫屋にはキタテハはモンシロやヤマトシジミに次ぐ普通種で注目を浴びることもほとんどないチョウである。夏に出現する型はくすんだオレンジ色でさえないが、秋に発生する型は鮮やかなオレンジ色に変わり、なかなかきれいである。成虫で越冬し、早春にまた見られるようになる。それにしても2月28日は早すぎる。こんな早い時期に見た記憶はない。

このチョウの秋型の記憶は狩野川台風(台風22号)と結びついている。昭和33年9月、伊豆半島に大きな被害をもたらしたこの台風は石神井川も氾濫させた。増水のペースはゆっくりとしていたので、板橋区では幸い人的被害はなかったと記憶しているが、栄町の我が家は床上浸水、中根橋下流左岸にあった数本の桜の大木はこの後枯れてしまった。コンクリートの橋であった中根橋に、上流から流されてきた数本の木造の橋が引っかかり、流れの勢いが強まったことが桜の枯死の原因になったのかもしれない。

台風が通り過ぎた後の青空の下、鮮やかな色に変身したキタテハに初めて気が付いた。夏型と秋型で翅の色も形も変わるなんて知らなかったのである。まだ水が引かぬ路上に浮かんでいた畳をいかにして乗ったことと、このキタテハの記憶は未だに鮮やかである。

1960年代、自宅付近にたくさん住んでいたキタテハも、1990年頃には中根橋小学校前にあった平屋の都営住宅地にかろうじて生き残っていたが、集合住宅への建替工事が始まるとともにいなくなってしまった。昨年秋、久しぶりに大山公園でキタテハを見つけた。同じタテハチョウ科でもルリタテハやヒオドシチョウなどと比べると、キタテハはあまり移動をしないようである。

キタテハの食草カナムグラが好む荒れた空き地も区内ではめっきり減ってしまった。芽だしの時期に暗い所に耐えられるヤブガラシはまだ自宅付近でも多いが、広く、明るい空き地が必要なカナムグラは市街地には見られなくなってしまった。荒川河川敷にはまだ多数生息しているが、1960年代に比べ、区内で最も個体数を減らしたチョウは多分キタテハであろう。

カナムグラは畑地や集落付近には多い植物だが、山深い所には見られない。キタテハも北地や高標高地に滅多に見られず、そこには代わりに良く似たシータテハが住んでいる。カナムグラは史前帰化植物であるという説もこれに基づいている。私は河川敷等に自生していた植物であるという見方だが、決着は難しいであろう。いずれにせよカナムグラもキタテハも日本列島に多くの人が住むようになり、森林を切り開くようになるにつれ勢力を増大させた種であろう。

東アジア温帯の特産種キタテハに対し、やや冷温帯よりのシータテハはヨーロッパ大陸からイギリスまで住んでいる。イギリスでは19世紀から20世紀初頭シータテハが激減したがその後回復したようだ。日本でもこの2種の個体数が今後大幅に変動するかもしれない。多分耕作方法や集落の在り方等の人為がこの変動に関与するのである。(釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会： 4月 3日(金) 18:30~20:30

5月運営委員会： 5月 1日(金) 18:30~20:30

場所はいずれもエコポリスセンター環境学習室

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月15日(金) 18:30~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったピオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ピオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

3月28日(土) 10:00~12:00

バッタ広場のササと木を切ります。

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば) 持ってくるもの：軍手

4月18日(土) 10:00~12:00

城址周辺クリーン作戦(赤塚ため池と城址周辺のゴミ拾い。午後は総会です。

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

4月18日(土) 13:00~15:00

いたばし水と緑の会総会

会場：赤塚5丁目集会所

4月25日(土) 10:00~12:00

浄蓮寺下ミニトンボ池の生物調査と池周りの枝切り

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば) 持ってくるもの：軍手

5月16日(土) 10:00~12:00

赤塚トンボ池の生物調査

篠原智男先生の植物画展3月24日(火)~29日(日)

場所；赤塚植物園講義室

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な使途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。